

函館の呉服商の家に生まれた。三人兄弟でひとつ違いの兄が医学部入学を果たしたところから、自分も医師の道を目指した。ケンカらしいケンカもないような穏やかな家庭で育った。そんな家庭環境が人に対する温かさを育んだ。函館と利尻島。同じ北海道ではあっても遠い存在だった島が、医師の道に踏み込んだとたん身近なものとなった。「以来、十五年間、思いつづけています」

島の中核病院

周囲五十三キロの利尻島には二つのフェリーターミナルがある。夏のシーズンを中心に訪れる約七万人の観光客を迎える島の玄関口だ。その一つ、沓形港からほど近い所に利尻島国保中央病院はある。約四二〇〇平方メートルの敷地内に、地下一階、地上二階の鉄筋コンクリート建ての病院が建つ。延べ床面積は約二六〇〇平方メートル。診療科目は内科、外科、整形外科、放

射線科、理学療法科、産科、婦人科。地域医療という特性からこれだけにとどまらず、小児科、耳鼻科、皮膚科、眼科、精神科なども診療対応している。訪問看護ステーションもつ。

常勤医師は内科医二人、小児科医一人、外科医一人。このほか、月曜日から金曜日まで札幌医科大学から産科の医師が派遣され、診察に当たっている。スタッフはほかに、看護婦十九人、助産婦三人、保健婦、放射線技師二人、臨床検査技師、薬剤師、栄養士、事務職員など、合計五十四人。

ベッド数は四十八で、入院患者は平均約三十五人。外来患者は一日平均約百九十人。利尻島には、ほかに北海道立診療所と利尻富士町立診療所の二つの医療機関があるが、人口約八千人の島民の約九割と、救急患者のほぼすべてを利尻島国保中央病院が受け入れている。

島の中核病院として果たすことは多い。成人病など慢性的な疾患はもちろ

へリコプターにより、迅速な航空機搬送が可能になった。搬送要請から利尻島にへリコプターが到着するまで数時間かかっていたものが、一時間三十分程度に短縮された。

それ以外にも、平成九年に産科が開設されたことで周産期医療が向上。年間一人にまで減っていた島内での出産が、いまでは年間三十五人前後にまで増えた。

こうした現実を見るにつけ、よくぞこれまでやれたな、と大西は思う。前回の勤務のときは、ここまでの態勢は整っていなかった。かつてともに働き、現在の基盤づくりをした、ひとりの先輩医師の存在を大西は忘れることができない。

熱血医師が島を変えた

平成六年四月。大西が最初の利尻島での勤務についたその年、自治医科大学十期生の西野徳之（三三歳・現札幌

市の北成病院勤務）が院長として赴任した。平成四年に最初の利尻での勤務を終えて島を去るとき、西野はすでに、院長就任の日を思い描いていた。そして、院長として初出勤の日。二年間で自分がやるべきことの青写真はすでにできあがっていた。

ひとつ、常勤医師を三人から四人体制にすること。二つ、産科施設の建設と産科の開設。三つ、救急搬送の改善。これらはすなわち、前回の勤務のなかから懸案事項として残ったものだった。医師四人体制の確立は、どうしても必要だった。三日に一度の当直。当直でなくても急患が運ばれてくれば病院に駆けつける毎日だ。同規模の病院が医師七人体制でしている仕事を三人でカバーしていた。要求はあっても、病院が財政的に厳しい状況であることも、また西野は理解していた。

学生時代に東日本医科学学生体育大会の評議委員長を務めるなど、卓抜なリーダーシップを持ち、世情にも明るい

んのこと、ガンなど悪性疾患や救急事態への対応に向けた医療設備も充実している。とくに、離島という特殊な地域をカバーするため、血液自動分析装置、全身用CT、X線TV透視装置、カラードップラー超音波断層装置、電子内視鏡、超音波内視鏡、人工呼吸器、血液ガス分析装置など高度な医療機器類を配置。悪天候などの事情で島外へ搬送や転院ができないときでも診断治療ができる一・五次救急医療をめざしている。年間、約百五十件の外科手術が行なわれている。

島内で対応できない重症患者や急患などは、フェリーなどの定期船で市立稚内病院へ搬送。脳内出血など、手術適応や搬送した方がいいのかどうか判断がつかない場合は、市立稚内病院との間で導入された画像伝送システムを活用する。レントゲン写真など病状を示す画像を稚内病院へ送り、専門医から適切な指示を仰いでいる。また、平成八年七月から導入された北海道防災

西野が考え付いたのは医療収益のアツプだった。実績を数字で証明し、発言力を強める作戦に出た。もともと、予防医学に力を入れていた。風邪の患者でも、喉の痛みや発熱といった症状だけにとらわれず、全身を診るよう努めてきた。必要と思えば、風邪の患者でも詳しい検査をした。

我慢強い島の人たちは、かなり病気を悪化させてからでないと病院にこない。「とりあえず元気で、働ければいい」といったのんびりしたムードが島にはある。そのため、末期ガンが初診で見られるということも一度や二度ではなかった。手の施しようのない患者を目の前に突然としたこともあった。西野にとってやりきれないことだった。「病院に来てもらうにはどうしたらいいのか」――考え抜いた末、病気の早期発見を兼ねた「誕生日検診」やガン検診などを発表、力を入れた。ひとり暮らしの老人や、病院にカルテがない住民を拾い出して、保健婦による